

Improvisation Basic vol.03 そのコードの中で伸ばせる音を探してみる

では、Improvisation Basic vol.03、始めていきましょう。

前2回では、主にフレーズを作る為に必要な、大元の発想について解説しましたね。

なので今回は、タイトルにもある様に、

『特定のコードの中で伸ばせる音(≒使いやすい音)』

を把握する、と言う「対応」の部分を考えていきたいと思います。

まず、通常の楽曲はコードの進行を含めて構成されていますが、各コードには構成音が存在しているので、それらの音とバッティングする音を不用意に使うとまずい(事が多い)わけですね。

例えば、C(CM7)と言うコード単体で見ると、C、E、G、(B)がコードの構成音なので、これらの音とお互いを阻害し合わない様にメロディーを構築するのが基本になってきます。

単純に考えれば、あるコードが鳴っている場合、そのコードの構成音を使えば問題は起きないわけです。

C(CM7)の場合で言うと、C、E、G、(B)の音を使えばとりあえず大丈夫、と。

譜例1、C&CM7、コードトーン

0 1 2 3
T 0 0 0 0
A 5 5 5 5
B 5 4 5 3

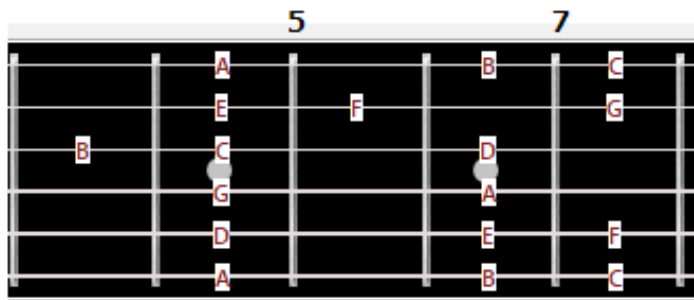
mf

3 2 5 5 5 3 5 5 8 8 3 2 5 4 5 5 5 8 7 8

この譜例は、5弦3フレットのC音をルートにしたCコードの周辺と、以前のテキストで使ったポジションで構成音を見た譜例ですね。

他にも、Cメジャースケールの代表的なポジション内で、Cコードのコードトーンを見みると以下の様になります。

図1、Cメジャースケール、重要ポジション



譜例 2、C メジャースケール、上記重要ポジション内、C&CM7、コードトーン

この辺りの音を使って、試しにフレーズを作ってみるとこんな感じです。

譜例 3、C&CM7、コードトーンを重視したフレーズ

曲調を決めていないので、少しのっぺりしたフレーズになっていますが、狙っている事としては、留まる音(伸ばす音)がコード・トーンになる様に弾いています。

ここまでの例はC(CM7)のみで見えてきましたが、これと同じような観点で他のコードの場合も考えていく事なりますね。

次に、単体のコードでは無く、複数のコードの中、要するにコード進行の中で、共通の構

成音を探す、と言う事をしてみましょう。

まず、key=C の 1-6-2-5 である、CM7、Am7、Dm7、G7 の進行で考えてみます。

C(CM7) → C、E、G、(B)

Am(Am7) → A、C、E、(G)

Dm(Dm7) → D、F、A、(C)

G(G7) → G、B、D、(F)

これらの音の中から隣り合ったコード同士での共通音を狙ってフレーズを作ってみましょう

譜例 4、隣り合ったコードで共通の構成音を狙う

The image shows a musical score for guitar, divided into two systems. The first system covers measures 17 and 18. Measure 17 is labeled CM7 and measure 18 is labeled Am7. The second system covers measures 19, 20, and 21. Measure 19 is labeled Dm7, measure 20 is labeled G7, and measure 21 is labeled C. Each measure contains a treble clef staff with a melodic line and a guitar tablature staff below it. The tablature shows fingerings for the strings, with numbers 0-5 and bar lines indicating fret positions. The melodic line consists of eighth and quarter notes, often beamed together, with a grace note (marked with a '7') in each measure.

それぞれ、CM7-Am7 間で C 音、Am7-Dm7 間でも C 音、Dm7-G7 間では D 音を、コード同士の境目で鳴らしています。

この譜例だけを見ると非常にシンプルですが、実際に楽曲を演奏している時に、こうした視点でプレイすることが出来るのか？と言う所がポイントです。
(※もちろん、常にこうしなけらばならないわけではありませんが)

今回のメインのテーマは、「そのコードの中で伸ばせる音を探す」と言う事なので、ワンコードの範囲で考える場合は、そのコードの構成音を弾けばいいわけです。

ですが、複数のコードを跨ぐ時に、何かしらの音を伸ばすフレーズが弾きたい場合、一番安定するのは両コードの共通音を選ぶことですね。

これらを踏まえた上で、先の譜例4で選んだ音を、シンコペーション等を絡めて弾いてみたフレーズが以下になります。

譜例5、隣り合ったコードで共通の構成音を狙う2

The image shows two systems of guitar notation. The first system is for CM7 and Am7 chords. The second system is for Dm7 and G7 chords. Each system includes a treble clef staff with a melodic line and a guitar tablature staff with fret numbers and a bar line.

もし、こう言った弾き方をする場合は、今鳴らしている音が、お互いのコードでどういったインターバルになるのか？を気にする必要がありますね。

小節を跨ぐシンコペーションは、少しトリッキーな感じになりますが、フレーズ作りの1つの方法として覚えておいて下さい。

簡単なコードバックングを作って、その上で弾いてみると、感覚が掴みやすくなるでしょう。

では、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼